



Data

監督: ジェームズ・マンゴールド
 出演: マット・デイモン/クリスチャン・ペイル/ジョン・バーサル/カトリーナ・バルブ/トレイシー・レッツ/ジョシュ・ルーカス/ノア・ジュプ/レモ・ジローネ/レイ・マッキノン/JJ・フィールド/ジャン・フランコ・トルディ/ジャック・マクマレン/ベンジャミン・リグビー/ジョー・ウィリアムソン

👁️👁️ みどころ

過去のカーレース映画の名作には名だたる名優が主演しているが、本作の主演はマッド・デイモンとクリスチャン・ペイル。すると、本作はこの2人がフォード社とフェラーリ社に分かれて争うもの？一瞬そう思ったが、さにあらず。本作では、フェラーリはあくまで倒すべき敵。そして、2人ともヘンリー・フォード2世の野望から生まれた、フォードのために戦う男たちだ。

すると、「戦車対決」がハイライトだった『ベン・ハー』(59年)と同じように、そのタイトルは『フォードvsフェラーリ』ではなく、「フォードとル・マン」とすべきだったのでは・・・？

それはともかく、本作では個人と組織のあり方、マネジメント論をしっかりと考え、ル・マンの優勝は個人の栄光？それともチームの栄光？それをしっかりと考えたい。

しかして、1966年の最終結果は？前代未聞の結末を生んだのもマネジメント論であり、フォード社の戦略だが、同時に、そこでの一匹狼の決断は？

カーレースの醍醐味と、2人の男の熱い戦いをトコトン楽しみたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■カーレース映画あれこれ。そこには男のロマンが満載！■□■

カーレースをテーマにした映画は多い。近時のそれは、F1レースを舞台に2人の男がライバルとして対決した『ラッシュ/プライドと友情』(13年)だった(『シネマ32』184頁)。私が青春時代を過ごした1970年前後には、三船敏郎のハリウッドデビュー作である『グラン・プリ』(66年)、石原裕次郎が主演した『栄光への5000キロ』(69年)、ス

ティーン・マックイーンが主演した『栄光のル・マン』（71年）等のカーレース映画がなぜか集中していた。

また、私が当時『素晴らしきヒコーキ野郎』（65年）と並んで魅せられた映画が、『グレートレース』（65年）。『素晴らしきヒコーキ野郎』が世界中の猛者を集めて1910年に実際に行われたロンドン・パリ間の飛行機レースを描いたメチャ面白い映画なら、『グレートレース』は、1908年に実際に行われたニューヨーク・パリ間の自動車のレースをおもしろおかしく描いた映画。そこでは、トニー・カーティスとジャック・レモンの快演がメチャ面白かったし、『ウエスト・サイド物語』（61年）で美しい歌声を聞かせてくれたナタリー・ウッドの魅力が満載だった。

カーレース映画が最近少なくなっているのは、それには膨大な資金が必要なため？そう思っていると、さすがハリウッド！何とマット・デイモンとクリスチャン・ペイルの二枚看板をひっ下げて、本作が登場！

■□■なぜフォード（米）とフェラーリ（伊）が対決？■□■

イギリスの離脱が決定的になった EU は近時衰退気味で、既にアメリカの競争相手ではなくなっている。まして、EU の中でもイタリアはスペインと並ぶ劣等国（？）だから、アメリカにとってはもはや何ら気にすべき国ではなく、今や「真の競争相手」と認識すべきは中国だけのはずだ。

他方、1960年代半ばの、自動車産業の面においては、アメリカのフォードとイタリアのフェラーリは？しかも、ル・マン24時間耐久レースにおける、フォード vs フェラーリは？1960年から65年までのル・マンではフェラーリが6連覇中で、絶対王者ぶりを示していたから、その当時のフェラーリにとって、アメリカのフォードなんて、おもちゃのような車を大量に作っているだけのつまらないメーカーだった。したがって、いかに経営的に行き詰まっているとはいえ、フェラーリの創業者エンツォ・フェラーリ（レモ・ジローネ）にとって、そのレース部門を売却しなければならない状況になっていることはわかってても、アメリカのそんなくだらないメーカーに売却するのは屈辱そのもの。そのため、若い世代のユーザーを魅了する速くてセクシーな車を作るようフォード2世（トレイシー・レッツ）に進言した、フォードでマーケット戦略を担当するリー・アイアコッカ（ジョン・バーンサル）は、全権委任を受けてイタリアに渡り、今、エンツォ・フェラーリと対面しながらの買収交渉に臨んだが・・・。

私は弁護士として大型の企業買収案件を担当したことはないが、本作のこのシークエンスは弁護士として非常に興味深い。もっとも、そこに双方の弁護士が同席していないのはいかにも不可解だし、リー・アイアコッカのちょっとした言葉にエンツォ・フェラーリが立腹し、フォードに対して罵詈雑言を投げつける風景も不可解だ。本作は、カーレース映画で、ル・マン24時間耐久レースにおけるフォード vs フェラーリの勝負を描くのが最大

のテーマだが、この買収交渉の姿ももう少し丁寧かつ正確に描いた方がよかったのでは・・・？もっとも、本作では、エンツォ・フェラーリのいかにも傲慢な振る舞いが強調されているから、それに激化したフォード2世が、以降どれだけカネをつぎ込んでいいから、「打倒フェラーリ」を可能とするレースカー造りを命ずる姿が強調され、それが本作の基調になっていく。つまり、本作は『フォードvs フェラーリ』とタイトルされているが、あくまでハリウッド映画であり、フォードの視点から「ル・マン24時間耐久レース」をとらえていくことになる。

ちなみに、ウィリアム・ワイラー監督の212分の超大作で、アカデミー賞最多11部門受賞を誇る『ベン・ハー』(59年)のハイライトは、ラスト15分間のユダヤ人のベン・ハーvs ローマ人のメッサラの「戦車対決」だったが、タイトルは『ベン・ハーvs メッサラ』ではなく、あくまで『ベン・ハー』だった。そうすると、本作を『フォードvs フェラーリ』としたのは誤解を招くもので、本来は『フォードとル・マン24時間耐久レース』とすべきだったのかも・・・？

■□■まれに天は二物を与えることも？その男は？■□■

1970年生まれのマット・デイモンも、1974年生まれのクリスチャン・ベイルも、今やハリウッドを代表する大俳優に成長した。とりわけ、マット・デイモンは『ボーン・アイデンティティ』シリーズが、クリスチャン・ベイルは『バットマン』シリーズが注目されているが、私には、マット・デイモンについては『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』(97年)での新鮮な若者の姿が、クリスチャン・ベイルについては『マシニスト』(04年)(『シネマ7』382頁)での22kgも減量した姿が強く印象に残っている。

天(神?)が地上の人間の誰にどんな才能を与えるのかは計り知れないが、無類の車好きの若者だったキャロル・シェルビー(マット・デイモン)とケン・マイルズ(クリスチャン・ベイル)に対して、天が共にカーレーサーの才能を与えたことは間違いない。しかし、冒頭におけるキャロル・シェルビーの心臓がそれに耐えられなくなるシークエンスを観ていると、その仕事がいかに過酷かがよくわかる。

そんな重篤な心臓病のため、やむなくシェルビーはレーサーの仕事を諦めたが、どうやら天は彼にカーデザイナーの才能と、さらにはマネジメントの才能までも与えたい。なぜなら、一介の民間企業に過ぎないシェルビーのもとには今、アメリカ最大の自動車メーカー・フォードから、ル・マン24時間耐久レースで、モータースポーツ界の頂点に君臨するイタリアのフェラーリ社に勝てる車を造って欲しいという途方もない依頼が舞い込んできたからだ。もちろん、これは、イタリアでのフェラーリ社買収交渉の決裂を契機としたヘンリー・フォード2世(トレイシー・レッツ)の決断によるものだが、さて、シェルビーはこれを受けるの？もし受けた場合、ドライバーは誰にするの？

■□■変わり者同士だが、ドライバーは「より変人」の方が！■□■

シェルビーは1959年のル・マンにアストン・マーティンで参戦し、アメリカ人レーサーとしてはじめて優勝した経験を持つ男だが、心臓病のためやむなくリタイアした男。そして、今はスポーツカー製造会社シェルビー・アメリカンの創設者として、そのカーデザイナーの才能を発揮していた。しかし、ル・マンまでわずか90日しか準備期間がない中、いくら金に糸目をつけないからといって、ル・マンで優勝する車を作るという依頼を引き受けるのは無茶。だって、引き受けるだけ引き受けて実現できなければ、それは債務不履行になってしまうからだ。少なくとも私が弁護士としてシェルビーから相談を受けて契約書を作るのなら、いくつもの「免責条項」を考えるはずだ。

ところが、シェルビーはフォード2世の本気度を確認しただけで、あっさり(?)引き受けてしまったから、マネジメント能力も兼ね備えている人物とはいえ、やはり相当な変わり者だ。

他方、それ以上の変人だったのが、今は自らが営む自動車修理工場を国税局に差し押さえられ、生活が行き詰まってしまっている元イギリス人カーレーサーのケン・マイルズ。シェルビーの話聞き、最初は鼻で笑っていたマイルズも、シェルビーの本気度を知るとビックリ。そんなマイルズは、妻モリー(カトリーナ・バルフ)と一人息子ピーター(ノア・ジューブ)から背中を押されたこともあって、シェルビーの無謀な挑戦に加わることを決意することに。

私は、レーシングカー開発の技術的なことはサッパリわからないが、本作後半では7000回転のエンジンのことが象徴的に描かれる。史上最高のレーシングカーを生み出すためシェルビーが目をつけたのは、フォードGT40の抜本的改良だが、さあ、その道のりは?

■□■組織?それとも個人?板挟みのシェルビーは大変!■□■

ル・マンで6連覇中のフェラーリに一泡吹かせて、あっと驚くフォードの勝利を!そんな夢に向かって今、シェルビーは金も人も自由に使える立場だが、そうかといって、何の制約もなし、というわけではない。シェルビーの上には、フォードのレーシング部門の責任者に就任した副社長レオ・ビーブ(ジョシュ・ルーカス)がフォード2世の代わりに君臨していたから、シェルビーはこのレオと、組織のことなど全く関心のない一匹狼のマイルズとのバランスを保つのが大変だ。あまりに身勝手なマイルズの行動と態度に立腹したレオは、マイルズを排除してしまおうとしたが、そこでシェルビーが取った非常手段は、フォード2世との直談判だったが、その成否は?

組織?それとも個人?そのどちらを優先させるのかという問題は、何かのプロジェクトを遂行する場合必ず直面する問題だが、本作ではその問題を巧みなマネジメント能力で処理し、乗り切っていくシェルビーの姿に注目したい。これを見ていると、まさに天はシェ

ルビーに三物を与えていることがよくわかる。そんな内部闘争を体験していく中、いつしかシェルビーとマイルズとの間に固い友情が芽生えていったのは当然だ。

しかして、いよいよ今日はマイルズがフォード1号車に乗り込んで、ル・マンに参戦する日。フォード社からは、マイルズ車以外の2台も参加していたが、フェラーリ打倒に向けて圧倒的に期待されているのはマイルズ車だ。マイルズ車はスタート直後にドアの不調をきたすというハプニングに見舞われたものの、何周かのラップを重ねていくうち、ついにトップを走るフェラーリ車を射程にとらえることに。さあ、このままレースは順調にマイルズ車の逆転優勝に進んでいくの・・・？

■□■個人の栄冠？チームの栄冠？一匹狼の最後の決断は？■□■

相撲やゴルフは完全に個人の勝敗を争う競技。しかし、野球やサッカー、ラグビー等は、チームの勝敗を争う競技であると同時に、個人の技をも競うものだ。しかして、シェルビーが開発したフォードGT40による1964年の1度目のル・マンへの挑戦も翌65年の2度目の挑戦も実らなかったものの、満を持して臨んだ1966年の3度目の挑戦では、ついにフェラーリ車を抜き去ったマイルズ車のトップは間違いなし！そればかりか、フェラーリ車がリタイアしたため、2番車、3番車もフォード車になったから、1、2、3位フィニッシュが確実に。

ところが、そこで持ち上がった問題が、ル・マンでの優勝は個人の栄冠？それともチームの栄冠？というもの。つまり、ル・マンでフォード社がフェラーリ社を打ち負かして優勝するべく全力を挙げてきたのは、シェルビーとマイルズだけではなく、フォード2世やレオ副社長も同じ。そこで、今現場に臨んでいるレオ副社長の頭の中にとっさに思い浮かんだのは、フォードの3台の車が並んでトップを飾ること。そんな映像が全世界に流れれば、フォード車の優秀さがセンセーショナルな形で世界に知れ渡ることになる。そのためには、今やっとならフェラーリ車を追い抜き、1人独走態勢に入ったマイルズ車のスピードを緩めさせなければならないが、一匹狼のマイルズはレオからのそんな指示に従うの？いや、マイルズはレオからのそんな指示には絶対従わないだろうが、シェルビーからの指示であれば従うの？しかし、シェルビーとしても、レオからそんな指示を受けても、こんな局面の中で、それをマイルズに指示することはできるの？本作ラストは、そんな葛藤をめぐる面白い人間ドラマが展開していくので、それに注目！

もちろん、ル・マンのファンはその結末を知っているはずだが、私を含む多くの観客はそれを知らないから、本作ラストでのシェルビーの決断とマイルズの決断に注目！さあ、本作ラストに見せる一匹狼マイルズの決断は如何に・・・？

2020（令和2）年1月17日記